九鬼氏のたどった海の道

寛永10(1633)年に海の鳥羽から山の三田へと移った九鬼家家中(かちゅう)ですが、当主の九鬼氏は熊野灘をめぐる海の道をたどった領主でもありました。九鬼家の系図(市史第３巻30号資料)によれば、九鬼氏はもと紀州九鬼(現・三重県尾鷲市)の住人で隆良(たかよし)の代に志摩国英虞郡波切村(しまのくにあごぐんなきりむら)(現・三重県志摩市)に進出し、紀伊半島から志摩半島に拠点を移したと伝えられています。

九鬼氏の名字の地である九鬼浦(くきのうら)は熊野灘の入り組んだ入り江で天然の良港です。反対の陸側は紀伊山地の険しい山並みに三方を囲まれ、周囲から隔絶した小宇宙のような領域を形づくっています。このような環境で九鬼氏は海に活路を求め、海の道を通じて交流を深めたのでしょう。現在、九鬼浦から波切までは陸路では紀伊山地を大きく迂回して130ｋｍあまりの道のりですが、海路をたどると島伝いにおよそ80ｋｍです。九鬼浦から熊野灘を渡ると70ｋｍ弱で志摩半島の南端に到達しますが、九鬼氏はさらに北上し、回り込んだ波切の地に拠点を築いたのです。志摩半島の各地にはのちに志摩七党(しましちとう)と呼ばれる有力な豪族が割拠していたので、新参の九鬼氏は戦略上の狙いを定めて波切に進出したのでしょう。

志摩半島に進出した九鬼氏は、志摩七党らと激しい勢力争いを重ねながら伊勢方面を目指して半島を北上し、現在の鳥羽市域に入ります。そこでの最初の拠点が現在の鳥羽市岩倉に築かれた田城城(たしろじょう)です。この地で九鬼氏は志摩七党をほぼ制するとともに、その過程で一族内部での主導権を九鬼嘉隆(よしたか)が握り、志摩を代表する戦国の大名としての地位を築きます。その後、嘉隆はさらに北上して鳥羽城を築き、織田・豊臣政権の水軍大将として名をはせたことはよく知られる通りです。九鬼氏は嘉隆とその子守隆(もりたか)の代に勢力が最大となり、伊勢湾沿いにも勢力を伸ばしました。このように海の道で成長した戦国の大名九鬼氏が、幕藩体制に適応した大名へと新たな展開を遂げるきっかけとなったのが、市史第１巻に詳しく述べられている通り、三田への転進だったのです。

生涯学習支援課 市史編さん担当